様式1（視察用）

会派行政視察報告書

平成２９年度会派　宮城維新の会　の行政視察研修を、平成２９年１１月２１日(火)に執り行いましたので、その概要を下記のとおり報告いたします。

平成２９年１１月２７日

名取市議会議長　郷　内　良　治　様

会派名　宮城維新の会
代表　吉田　良

記

１ 期　　日　　平成２９年１１月２１日（火）

２ 参加人員　　１名　　〈氏名〉吉田　良

３ 視 察 先　　(1)岩手県奥州市

４ 行 程 表　　別紙のとおり

５ 調査事項　　別紙のとおり

６ 所　　感　　別紙のとおり

名取市
議会事務局
29.11.27
第　　号
受付

「宮城維新の会」会派視察行程表

平成29年11月21日（火）

11/21	名取駅 11:09 → 仙台空港アクセス線 → 仙台駅 11:23 11:36 → やまびこ45号 → 一ノ関駅 12:10 12:28 → 東北本線 → 水沢駅 12:51 13:00 → 徒歩 → 奥州市役所 13:15 15:10 → 徒歩 街並み視察 → 水沢駅 17:11 → 東北本線 → 一ノ関駅 17:35 17:48 → はやぶさ108号 → 仙台駅 18:19 18:34 → 仙台空港アクセス線 → 名取駅 18:48	岩手県奥州市　視察　13:30～15:00 〒023-8501　岩手県奥州市水沢区大手町一丁目1番地 TEL　0197-24-2111 議会事務局　千葉 奈津美 様 「グリーンツーリズムについて」

宮城維新の会管外行政視察報告書

視察場所　岩手県奥州市

視察日時　平成２９年１１月２１日（火）　１３：３０～１５：００

視察項目　グリーン・ツーリズムについて

対応者　農政課長　鈴木　清浩 氏
　　農政課農政係主任　菊 池　健 氏
　　議会事務局　千葉奈津子 氏

報告者　吉田 良

１　奥州市の概要

奥州市は岩手県内陸南部に位置し、市のほぼ中央を一級河川北上川が流れ、その西側には北上川の支流である胆沢川によって開かれた胆沢扇状地が広がり、東側は北上山地につながる田園地帯が広がるとともに丘陵山岳地帯となっている。北は北上市・西和賀町・金ケ崎町・花巻市、南は一関市・平泉町、東は遠野市・住田町、西は秋田県に隣接し、東西に約５７km、南北に約３７kmの広がりを持つ市である。

市域面積は９９９．３万㎢。うち６１，７３７haを農業振興地域として指定している。その内訳は、農用地が２３，３４７ha（３７．８％）、農業用施設用地１６０ha（０．３％）、山林・原野２６，４３１ha（４２．８％）、その他１１，７９９ha（１９．１％）となっている。農用地区域内農地の利用状況は、１９，９４０haのうち田１６，４８２ha（８２．７％）、畑２，９００ha（１４．５％）、樹園地５５８ha（２．８％）となっている。

主な農産品としては、水稲（生産額岩手県１位）、肉用牛（前沢牛）、りんご（江刺りんご）、ピーマン、ハトムギ、りんどう等がある。

２　事業実施に至る背景

現在の「おうしゅうグリーン・ツーリズム推進協議会（以下おうしゅうＧＴ）」は、衣川、いさわ、前沢、えさし、水沢の５支部、及び平泉グリーン・ツーリズム推進協議会（以下平泉ＧＴ）から成っている。支部は合併前の市町村単位に設置されており、平成２７年まではそれぞれ協議会として存在していた。

水沢区以外では、市町村合併以前から都市農村交流を目的に協議会等の組織が存在し、それぞれグリーン・ツーリズム等の事業を推進してきた。特に旧衣川村では、昭和６３年度から村おこしの一環として、他地域に先駆けて首都圏の修学旅行生の受け入れを開始してきた。いさわ、前沢が追随し、衣川だけで受け入れきれない規模の学校を協力して受け入れる関係

にあった。

平成１８年度の市町村合併を機に、衣川村、胆沢町、前沢町で取り組んできた教育旅行生の受け入れを一括整理し、おうしゅうＧＴを発足した。平成２０年に水沢と平泉町、２１年にえさしのそれぞれのグリーン・ツーリズム推進協議会が加入し、現在の組織の大枠が築かれた。当初は旧協議会単位で事務局を置き活動していたが、平成２８年に平泉町以外の協議会を解散して支部化し、おうしゅうＧＴとして事務局を集約した。現在においても支部活動は行われており、それぞれに独自の考え方が色濃く残っている。

なお、平泉町ＧＴは単独での受け入れも実施している。

３　他自治体や民間との協力関係の構築方法

現在おうしゅうＧＴでは、会長以下役員は受け入れ登録農家のみで構成されている。一方、事務局は事務局長（農政課長）以下、農政課職員のみで構成されている。

衣沢や胆沢では協議会発足当初、地域の商工会や農協など外部の協議会員がいたこともあったようだが、基本的に行政（町村長）が声掛けした結果と思われ、地縁や顔見知りなど、住民同士のつながりの濃い時代の小規模自治体ならではのことと言えそうである。

現在の協力関係としては、奥州市商業観光課との連携が中心である。商業観光課で担当し、宮城県、岩手県の他市と連携している伊達な広域観光推進協議会で作成した「伊達な学び旅」という震災学習プランにおいて、商業観光課から当協議会での農泊を行程に入れたプランを作成し、旅行会社に提案しており、実際に伊達な学び旅の行程での農泊受け入れもあった。

また、宿泊業組合、観光協会などが会議員として参加している「どんとこい奥州誘客会議」の一員となっており、この会議の活動の一環として旅行会社への説明会に参加し、誘致活動を行っている。

商業観光課との連携が多い理由としては、当協議会の大きな売りは、単独の協議会として「１学年で４００人規模の大規模校の受け入れが可能」ということである。奥州市内では、一度に４００人規模の客を安定して宿泊させられる施設がほとんどなく、こうした集団は花巻温泉や盛岡近郊の温泉、安比高原で宿泊している例が多い。滞在型観光を目指す観光サイドとしては、おうしゅうＧＴでの受け入れは一つの大きな観光資源と考えているとのことである。

４　プランや体験項目などの事業内容

おうしゅうＧＴでは、「農林漁家への民泊に係る取扱指針」「岩手県体験型教育旅行推進計画」に基づき、営利を目的とせず、旅館業法や食品衛生法の許可等を要さない形での受け入れを行っている。

受け入れ農家の登録、農家の交流や簡易な研修、実際の受け入れに関し支部として取り組む事柄、受け入れ予約の取りまとめ等旅行代理店との窓口、受け入れ農家と生徒班のマッチング、旅行会社への体験料請求及び振り込まれた体験料を農家へ振り込む業務は、事務局業

務としている。

事務局を行政で持つことで、旅行会社からの信頼度がＮＰＯ法人や任意団体より高まると思われる。ただ、担当課としては今後のニーズの多様化に対応し、受け入れ農家の質の向上を目指すためにも、将来的にＮＰＯ法人など民的な組織に発展してほしい。

なお、農作業・農村生活体験メニューは、協議会や支部として規定したものはなく、原則として受け入れ農家の裁量である。お客様扱いではなく、親戚の子が来るような心構えで歓迎することがモットーである。

＜体験例＞

●農作業

・田での農作業（田植え、稲箱洗い、稲刈り、はせ掛け、ホニオ作り等）

・畑での農作業（野菜の播種、苗植え、りんごの摘花や収穫など）

・畜産（牛の餌やり等）

●食事、おやつづくり

もちつき、すいとん、がんづき、芋の子汁、そば打ち、うどん作り、バーベキューなど

※食事について、協議会としては地域の伝統的、または特徴的なおかずを最低１品は提供するよう申し合わせている。また、受け入れ農家は、生徒と一緒に調理できる料理や、大勢で楽しめる料理を選択し、コミュニケーションを取る傾向にある。

●農村生活体験

・星空観察（衣川区は「星空日本一」の実績あり）

・農業施設見学

・ホタル観察

・薪割り、薪運び

・温泉や公衆浴場での入浴（活動時間確保の意味合いが強い）

5　広報の進め方

・ＨＰでの広告

・協議会として旅行会社を訪問してのＰＲ

・どんとこい奥州誘客会議の枠内で説明会等に参加してのＰＲ

・毎年継続している常連校の受け入れ、常連校と同エリア・近隣市町村からの新規受け入れ

6　事業実施による効果

平成２７年度受け入れ約３，９００人。平成２８年度受け入れ約３，５００人、体験料収入約４，６００万円。

交流面では、受け入れ後も交流が続いて再び奥州市を訪れる例、生徒が成人した後結婚

式に招待された例、教員が個人的に家族と農泊に訪れる例もあり、毎年の子どもたちの受け入れが楽しみになっている方もある。金額としては見えない部分で、交流や活性化に関しての効果があると言える。

大規模校の受け入れが評価され、平成２５年に「オーライ！ニッポン大賞グランプリ」内閣総理大臣賞を受賞。協議会、会員の誇りと自信になっている。

7　今後の課題

＜受け入れ登録農家数の維持・増加＞

受け入れ農家数は、平成２６年の約１８０をピークに減少の一途をたどっている。原因として、農家の高齢化、過疎化等により農家戸数自体が減っていることが挙げられる。

また、別の要因として受け入れ農家の（精神的）疲労の蓄積による意欲の低下がある。生徒たちが無事に帰ったあとは、どっと疲れが出るというのが本音である。さらに、学校行事として５～６月、９～１０月に野外活動・修学旅行が組まれることが多く、結果として受け入れが集中する。その時期は農繁期でもあるため、それぞれ自らの農作業日程や日常生活を削って受け入れざるを得ないため、この時期の疲労蓄積度合いは大きく増す。

大規模校の受け入れができることがおうしゅうＧＴの特徴であるが、受け入れ農家戸数が減少すれば大規模校に対応できなくなり、結果としてほかのＧＴ組織と差がなくなる。今後は活動が先細りしていくことが懸念される。

＜ニーズへの対応＞

現在、利用する側のニーズが多様化し、津々浦々に設立されるグリーン・ツーリズムは団体ごとにニーズに応えようと個性を出している。体験を活用した観光事業への対応が求められる時代であることを実感している。

旅行会社は、特に近年、生徒側は消費者、協議会（農家）側はサプライヤーであるとして「普通の旅行」と同等に扱おうとする傾向が強まっている。生徒側は体験料相当の体験ができるとの期待を持ち、協議会側は対価、サービスとして受け入れや体験を提供する、という考え方である。

おうしゅうＧＴは、営利目的としてではなく、普通の農家として交流を趣旨に、親戚の子どものつもりで受け入れることをモットーとしているが、必ずしも期待に沿った受け入れ対応になるとは限らない。数は多くないものの、おうしゅうＧＴでも毎年のようにクレーム案件が発生している。

今後は、教育旅行であっても利用者側のニーズが「利用者＝消費者」「受け入れ＝サービス」「農作業体験＝コンテンツ」という意識に移るものと思われる。利用者側が交流以上にサービスとしての「質」「期待値（体験料）相当のサービス」を求めるのであれば、それに対応することも必要になるだろう。

＜自立意識の醸成＞

どちらかというと、農家も責任をもって課題解決に取り組もうという協議会が、水沢、えさしといった比較的新しい協議会である一方、旧町村部の協議会では「行政主体で」という意識が強い。意見の対立とまでは至らないが、各協議会の考え方が異なり、おうしゅうＧＴとして意識が統一されているとは言い難い。協議会の方向性が定まらず、最終的に事務局に頼りがちになっている。

今後を考えると、おうしゅうＧＴは全て自らの運営責任において、収益性や受け入れの質の改善等、純粋に受け入れ農家組織の事業として発展していく段階に来ていると、事務局は捉えている。

８　所感

平成２７、２８年にみどり台中学校が、今年は第二中学校が、野外活動として奥州市のグリーン・ツーリズムを利用した。報告者の周辺からは、取り組みを高く評価する声が聞かれ、本市も同様の事業を行うことを検討してはどうかという意見もあった。そこで視察に伺うことを決めた次第である。

奥州市からの説明を聞いてまず感じたのは、市の置かれた状況が類似している点があることである。それは、近い距離に空港がある一方で、市内に宿泊施設や集客の目玉となる施設が少なく、観光客の多くがほかの自治体に流れていることである。市としては、これまで主に宿泊学習のために行われてきたグリーン・ツーリズムを、インバウンド拡大のために進化させることを目指す姿勢だが、これまでの長く継続されてきたことが、かえって変化を難しくしているという側面もある。本格的な宿泊利用のニーズに応えるためには乗り越えなければならない課題が多く、高齢化が進む小規模農家にはそこまでの体力がないというのが現実である。

一次産業従事者の数の減少や高齢化は、本市にとっても見過ごせない問題である。グリーン・ツーリズムに取り組むことにより、インバウンドの拡大はもちろん、農業への関心・理解を深めることや、農家所得の向上などさまざまな効果が見込めるが、行政が主導するのではなく、農家から自発的に取り組まれることを待つべきであろう。